

2018年	11月現在
会 員 数	328人
賛 助 会 員 数	17施設

ソーシャルワーカー 協会だより

第113号

■発行：新潟県医療ソーシャルワーカー協会 ■事務局：新潟大学医歯学総合病院 ■発行：平成31年1月

巻 頭 言

新潟市地域包括支援センター
鳥屋野・上山

和田 健治



当協会広報担当理事の和田と申します。私は専門学校で社会福祉を学び、卒業後は新潟市内の介護老人保健施設に介護職員として入職しました。支援相談員への異動を機に、先輩相談員の勧めで平成12年に新潟県医療ソーシャルワーカー協会に入会しました。入会後は新潟県で開催された北信越医療ソーシャルワーク研究会の手伝い以外は協会活動に参加しない日が続きました。

しかし、縁あって約10年前に広報部理事に就任し、協会だよりの編集を担っています。会員の要望は何か、ニーズは何か？どのように表現したら活動内容が会員に伝わるのか悩み続けました。協会活動に参加したくても参加できない、または興味自体を持つことが出来ない会員は、協会の活動：メゾレベルソーシャルワークが分からない状態であると仮説を立てました。そこで、会員や地域へタイムリーに協会活動を伝えることが妥当と考え、今年度の広報部の目標を「見える化することから始める」にしました。

具体策として今年度の協会だよりの発刊回数を5回（紙面発刊を2回 県協会ホームページに3回掲載）としました。協会の活動を通じたメゾレベルソーシャルワークを見える化することで、会員が協会活動に参画する必要性を強く意識できることに繋げることが、我々のミッションです。ぜひ、協会が主催する研修に参画ください。

J A厚生連 上越総合病院
今井 一徳



広報部理事の今井と申します。私は地元の高校を卒業後、県外の大学へ進学し社会福祉を学びました。卒業後は新潟県に戻り念願だった医療ソーシャルワーカーの仕事に就くことができました。しかし、慣れない土地での生活や日々のソーシャルワーク業務に不安だらけでした。

そんなときに当時の職場の先輩から新潟県医療ソーシャルワーカー協会を紹介していただき、自己研鑽や仲間づくりができると思い迷わず入会しました。

その後、新人研修をはじめ、さまざまな研修会に参加し、たくさんの会員の方々と出会い、職場以外でも気軽に相談できる仲間が増え、多くの知識を得ることが出来ました。気がつけば当協会に入会して10年が経ちました。これまでに転勤や職場内での役割、またプライベートでは家庭をもったりと自身の環境が変化するにつれ、協会活動に参画する機会が減っていました。そんな受け身がちだった自分自身を変えるひとつのきっかけになればと今年度から理事に就任することになりました。

広報部では活動報告集の作成を担当しています。会員の皆様の日々の研究・活動の成果や当協会の活動実績を多くの方々に読んでいただけるよう魅力あるものにしたいと考えています。

理事活動を通じて当協会の発展に貢献できるよう精進してまいります。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

第32回北信越医療ソーシャルワーク研究会に参加して

岩室リハビリテーション病院 前田 美紗子

第32回目の北信越医療ソーシャルワーク研究会は「患者中心の医療と意思決定支援～MSWがいま、すべきこと、できること～」をメインテーマに10月13日・14日に富山県で開催されました。初日の記念講演では、社会福祉法人恩賜財団済生会理事長炭谷茂氏より「地域包括ケア時代のMSWに期待すること」、また、WITH医療福祉実践研究所がん・緩和ケア部田村里子氏より「MSWの意思決定支援」についてご講演をいただきました。講演の中では、ソーシャルワークがどのようにして生まれ、発展してきたか、その背景にはソーシャルワーカーにどんな期待があったのかという起点を踏まえ、多様化する生活スタイルや、日々変わりゆく社会情勢の中において、「Life」を生命・人生・暮らしの多重の意味で捉え、対人援助の専門職として目の前のクライアントにどう向き合っていくか、自身が「何者」で「誰」に対し「何を」する存在なのかを問いかけられたように考えました。「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」が改訂されたことから、医療ソーシャルワーカーとして積極的に「Life」に関わることを求められているのだと思いました。

今回の研究発表会（分科会）では「介護療養病床における終末期の関わりについて」というテーマで演題発表をさせていただきましたが、発表に向けて自身の実践を振り返り、結果を考察・検証することは、次の実践段階に移る為にも非常に重要な過程であり、これまで漠然としていたことが言語化され、今後取り組むべき課題が明確になる貴重な機会であると改めて認識するとともに、フロアーや座長との質疑応答や意見交換なども含め、多くの気づきを得ることが出来ました。研究発表のテーマは様々ですが、ソーシャルワーカーが置かれた所属機関や、地域におけるメゾ・マクロレベルでの実践やソーシャルアクションなど、取り組みのレベルの高さに多くの刺激を受けました。研究発表会で出会った隣県ソーシャルワーカーが行う先駆的な取り組みや、実践の質を高めるべく努力を続ける姿勢に活力を得、新潟県に、また、自身の実践現場に持ち帰りどう活かせるかという宿題をいただいたことも含め、2日間大変貴重な経験をさせて頂きました。

平成30年度 新潟県医療ソーシャルワーカー第1回新人研修

新潟県立吉田病院 鈴木 健介

先日の新人研修では坂詰会長はじめ教育研修部の皆様より講義、演習とご指導いただき誠にありがとうございました。

午前の講義では医療ソーシャルワーカーとしてあるべき姿を考えることができました。講義を受け終えた時、坂詰会長自身が人と人との出会いを大切にし、人生のターニングポイントと位置づけ多くの人の考えを聞き、学び、吸収してこられたことが強く印象に残りました。私もこの協会の活動で出会う同世代、先輩のソーシャルワーカーとの出会いを大切にしていきたいです。

午後の面接演習では普段病院で1人ワーカーのため行うことが難しいロールプレイを通して、自身の面接を振り返ることができました。これまで私が行ってきた面接を振り返るとクライアントの想いに十分に耳を傾けることができず、ソーシャルワーカー主導で行っていたこともありました。今後も面接の予定が立っています。観る、聴く、考える、話すことを意識して実践し、クライアントに語っていただくための面接技術、インタビュー力を早く身に付けたいと思います。

白根大通病院 前澤 梨沙

医療ソーシャルワーカーとして、入職し、早10か月が経ちました。医療の現場が初めてという事もあり、環境に慣れる事から日々、緊張しながら過ごしています。

午前は基調講演ということで、「医療ソーシャルワーカーとは」という内容から援助技法について講演をしていただきました。その中で私の印象に残っている内容として、ソーシャルワークは面接にはじまり面接に終わる。面接の基本は①観る②聴く③考える④話すという内容でした。

基本的な事かもしれませんが、患者様・ご家族の情報を知る上で相手の事を良く観て、話を傾聴し、その背景・問題点を見つけ出し、一緒に考えるという流れはどの場面においても必要な姿勢だと改めて考えました。

また、午後では、実際に模擬面接を行い、3者(患者・家族・医療ソーシャルワーカー)の立場に立って感じる事・気づき等を3人グループでディスカッションしました。各々の役を演じた事で、面接技術の視点が変わり、各々の気持ちや言葉の意図など客観的に考え、見直すことができた時間となりました。

患者様、一人を対象を当てて問題を抽出するのではなく、ご家族やその周りの社会的要因も含めて問題解決に繋がるように考えていくことが求められるものだと考え、日々の業務の中で心掛けていながら携わっていきたいと思いました。研修を通し、医療ソーシャルワーカーとして必要な知識や姿勢を学ぶことができ、今後、自分自身がどのように支援していきたいのか考える事のできるとても良い研修となりました。

新潟信愛病院 川崎 莉歩

第一回MSW新人研修の午前の部では、坂詰会長の講演を拝聴した。坂詰会長の講演の中で、クライアントだけでなく、職場の他部署のスタッフ、関係機関などのパフォーマンスを上げることで、クライアントにとって良い支援に繋がるという、波及効果についての内容が特に印象に残った。

実際の現場では、手段や方法は異なるが、多職種がそれぞれの役割で、一人のクライアントに関わっていく。基本的なことではあるが、職種が異なるからこそ、それぞれの職種を理解することや、相手の業務や状況をみること、情報共有することをより心がけなければいけないと思った。また、クライアント含め、相手のパフォーマンスを上げるためには、自分自身が業務に追われ余裕がなくならないように努めたいと思った。

午後からは8人1組となり、クライアント役・SW役・オブザーバー役に分かれ、ロールプレイ方式で模擬面接を実施した。実際にそれぞれの役を体験して考えたのは、クライアント役になったときに想像以上に緊張感や疲労があったことである。

実際に初対面のSW役の方との模擬面接ということもあり、日々の業務でクライアントが感じる緊張感に似た状況を体験できたように思う。また今回は、あらかじめ設定されたクライアントの役になり面接を行ったが、設定されたクライアント役でも、相手に伝えることの難しさや伝わらないことの歯がゆさを感じた。実際、本人・家族には障がいや疾病、年齢や体調によって、または時間の節約など、より様々な状況が伴う。SWはそういったクライアントの背景も含め、相手がどんな状態か、きちんと相手を尊重した面接になっているか、みること、感じること、そしていかに語りを引き出せるかを常に意識しないといけないと考える良い機会となった。



平成30年9月29日 第1回新人研修
会長、理事、運営委員、受講者の集合写真です。今号では3名の受講者から研修の感想をいただきました。
会員のみなさま。読んでいただき体感してくださいれば幸いです。
広報部

保健医療福祉行政の最新情報を聞く会報告

～認知症初期集中支援チームについて学びました～

社会活動部

平成30年11月22日(木)新潟ユニゾンプラザで保健医療福祉行政の最新情報を聞く会を開催しました。今年度は「認知症疾患医療センター・認知症初期集中支援チームの取り組みと展開～ソーシャルワーカーに期待すること～」をテーマに総合リハビリテーションセンター・みどり病院 院長 兼 みどり病院認知症疾患医療センター センター長の成瀬聡先生よりご講義いただきました。

新潟市では平成28年1月より「認知症初期集中支援推進事業(モデル事業)」を実施しています。この事業は「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で暮らし続けることができる社会」を実現するため、おれんじサポート(認知症初期集中支援チーム)を配置し、適切な支援につながっていない認知症の方を早期発見・早期診断・早期支援に向けた支援体制を構築することを目的としています。

認知症初期集中支援の実施内容としては訪問支援対象者の把握、情報収集、アセスメント、家庭訪問、チーム員会議、関係機関との連携、モニタリング、記録等です。支援期間は、訪問支援対象者が医療サービスや介護サービス等による安定的な支援に移行するまでの間で概ね6か月間となっています。

平成30年度より、全市町村で認知症初期集中支援チームが活動しています。認知症の初期の段階から切れ目なく支援を続けることの重要性、多職種で関わることで色んな視点が生まれ、支援の幅が広がるという可能性を学びました。

一方で、介入の難しさもあり、上手くいかなかった事例も紹介していただきました。いわゆる“困難ケース”と呼ばれるクライアントに対する支援にこそ、我々のソーシャルワーク力が試され、必要とされるのではないのでしょうか。クライアントはどんな生活を望み、何を思い、何をしたいのか(あるいは、何をしてほしいのか)。過去を知り、今を見て、未来につなげる。そんな支援ができるように多職種連携で根気強くクライアントと向き合っていきたいと改めて考えることができた貴重な研修でした。アンケート結果でも、「今後の仕事に役立つ」という感想が多かったです。

勤務終了後という時間帯での開催にも関わらず、52名の参加をいただきました。そして、今回の研修では、より多くの職種の方々にも成瀬先生のお話を聞いていただきたく、他職能団体にも参加を呼びかけました。ケアマネジャーや介護福祉士、弁護士など私たちソーシャルワーカーがこれからも連携していく“同志”と共に学べたことを嬉しく思います。

新潟県医療ソーシャルワーカー協会 ホームページのお知らせ

当協会のホームページを下記のURLで各部局の活動、研修会情報などを公開しています。

今年度の協会だより111号は、MENU ⇒ 広報部からの連絡 ⇒ 協会だよりに掲載しています。ぜひご覧ください。

<https://www.ngt-msw.com/>

広報部：和田健治・今井一徳